大学と地域の連携を活かした遊びの場づくり
ムーブメント教育・療法の活用

小林芳文 所員／現代人間学部教授
大橋さつき 所員／現代人間学部准教授

1 —— はじめに

本稿は、2009 年度までの活動報告「和光大学から発信するムーブメント教育・療法の軌跡と展望」[1)] に続き展開された、2010、2011 年度和光大学総合文化研究所の研究プロジェクト（「あそびのわわわプロジェクト」）と関連する公開シンポジウム、東日本大震災を受け 2012 年度より開始した「東北版あそびのちからはいのちのちから」、そして、2014 年度和光大学開放センター地域連携講座「子どもの育ちに寄り添うムーブメント教育・療法の理論と実践」等の内容を報告するものである。

これらの取り組みや関連して発展した活動を概観し、「ムーブメント教育・療法」による遊びの場づくりを通した大学と地域連携の成果と新たな課題について明らかにする。

2 —— 活動の基盤と背景

プロジェクトの理論的基盤となる「ムーブメント教育・療法」は、アメリカのマリアンヌ・フロスティッグ（Marianne Frostig）らによって体系づけられたもので、運動遊びを基本にした動きづくり、身体づくりが軸になっており、それらを通して認知的発達から情緒的・社会的発達に至るまで調和のとれた全面発達を促していく活動である。欧米諸国では、1970 年代から急速に発展し、人間発達の基礎づくりのために有効な手段として注目されてきた。国内でも 30 数年前から、とりわけ心身の発達に障害のある子どもの教育に有効であると評価されており、最

1）小林芳文・大橋さつき「和光大学から発信するムーブメント教育・療法の軌跡と展望」,『東西南北 2010』和光大学総合文化研究所，2010，pp. 99-113.

近は、特別支援を中心とした学校、療育、保育の現場や子育て支援、高齢者のリハビリテーションなど様々な現場において広く活用されている。

ムーブメント教育・療法で行われる身体運動の課題は、前述のように身体技能だけでなく、情緒や社会性、認知といった他の諸機能の発達を助長するところにある。つまり、子どもの発達の全体に関わる行動を身体運動に結びつけて捉えており、諸機能の発達にとって必要な身体運動を充分に経験させることで、子どもたちの自発性と喜び、達成感、創造性等心理的諸機能も支援することをねらいとしている。

また、ムーブメント教育・療法は、指導者中心の訓練的活動とは異なり、遊び的要素やファンタジーの要素を持った子ども中心の活動であり、個々のニーズに合った適切な環境を設定することを重要視している。すなわち、様々な遊具や教材、音楽の工夫などにより、参加する子どもが自ら動きたくなる環境を活用し創造することで、自然な動きの拡大や発達の好循環を図ることを目指している。

このようなムーブメント教育・療法の理論に基づいて、2004 年度から和光大学内で親子ムーブメント教室が開催されるようになった。家族支援、地域支援の活動として展開され、大学周辺地域の親子を中心に、障害のある子どももない子どもも一緒に楽しんで参加してきた。特に、遊具や音楽や設備と同様にその場に集う「人」も互いに「環境」となるという考え方から、子どもも保護者も学生たちも全ての参加者が主体的に参加し、共に場を創る活動を重視してきた。学生たちの積極的な参加により、プログラムは創造的な発展を遂げ、全体の流れにテーマ性を持たせたり、世界観を演出する遊具を作成したりする工夫の中で、場の一体感が増し、子どもたちの活き活きした動きや保護者の笑顔を引き出すことができた。

また、ムーブメント教室の実施と連動して、地域との連携を図り、家族支援や地域支援におけるムーブメント教育の活用を主なテーマに、公開教室やシンポジウム、講座を開催してきた。毎回、教育、福祉、保育、療育等の分野から多くの地域市民の参加があり、研究者や学生と共に意見を交わし学び合ってきた。

3――「あそびのわわわプロジェクト2010−2011」について

(1) プロジェクトの目的と構成

このような流れを受けて、2010 年度より 2 年間の計画で和光大学総合文化研究所の研究プロジェクトとして「子どもの育成支援を巡る遊びの環境づくりに関する実証的研究―大学と地域の連携による包括型プログラムの活用を中心に」(通称：「あそびのわわわプロジェクト」) が実施された。子どもの育ちと子どもを取り巻く家族や地域を支援するための活動のあり方を「遊びの場づくり」という視点から考察することをプロジェクトの目的としており、和光大学を拠点とした既存

の活動をもとに、施設・遊具・自然環境・人材・組織・ネットワークなど、大学や地域の様々な「環境（資源・財産）」を活かし、それらの潜在力を高め、連携を強化するための試みを展開してきた。また、特に支援を必要とする子どもたちに対して「対象別・目的別の支援」のあり方を研究した上で、最終的には様々な子どものニーズに対応し、一人ひとりの個性が共に発揮できる包括的で楽しいプログラムの開発に取り組んだ。プロジェクトの愛称は、遊びの**環**境づくりをテーマにたくさん**話**して、**わ**くわく、**わ**らって、喜びを**わ**かちあうような**和**やかな**輪**を広げていきたいという願いから「あそびのわわわプロジェクト」と名付けられた。

プロジェクトは、筆者らの他、和光大学内外の研究者で構成され、また、和光大学初代学長梅根悟が創立にあたり掲げた「大学は自由な研究と学習の共同体」であるとの理念を重視して、学生との連携も積極的に図った。

一年目の 2010 年度の主な活動としては、①分担研究者らによる既存の実践の分析と可能性や課題の共有、②和光大学を拠点とした「遊びの環境」に関する現状調査と地域連携プログラムの実践、③対象別・目的別の遊びのプログラムに関する基礎研究、④関連する取り組みの現地調査・情報収集、⑤公開講座・研究会等の開催があげられる。二年目の 2011 年度は、①大学と地域の連携による遊びのプログラムの開発、②モデルプログラム活用のための支援ツールの作成、③公開講座・研究会等の開催、そして、④研究総括に向けたシンポジウムの開催を主な課題として活動を展開した。

（2）保育士・教師のための「遊びの場づくり」研修講座

2010 年度よりプロジェクトの一環としていくつかの公開講座や研究会を実施してきたが、それらに参加する地域の保育士・教師からのニーズに応える形で、2011 年度 5 月より計 8 回の連続講座が実施された。日頃から子どもの支援に携わる方々にとって、「明日から役立つ！」を合い言葉として、より具体的な方法論を示すことができるよう講義と実技をバランス良く織り交ぜた内容で構成された。また、この研修講座のテキストをイメージして作成された『遊びの場づくりに役立つムーブメント教育・療法』[2)] も解りやすいと好評であった。参加者のアンケートからは、講座が確実に保育士や教師の意欲を向上させスキルアップに繋がっている手応えを得た。さらに、同じのメンバーで約 5 ヶ月間にわたり連続して集ったことにより、参加者同士での交流や意見交換が活発に行われるようになり、地域の子どもの教育支援に関わる者同士が繋がる機会となった。人材の交流

2）小林芳文・大橋さつき『遊びの場づくりに役立つムーブメント教育・療法――笑顔が笑顔をよぶ好循環を活かした子ども・子育て支援』明治図書，2010．概要については、梅原利夫「ブックレビュー 小林芳文・大橋さつき 著『遊びの場づくりに役立つムーブメント教育・療法――笑顔が笑顔をよぶ子ども・子育て支援』」，『東西南北 2011』和光大学総合文化研究所，2011，pp. 259-261．を参照。

や施設間の連携を促すという点においても大学を拠点とした活動の意義を見出した。

(3) 公開シンポジウム

本プロジェクトに連携して、和光大学内において 2 つのシンポジウム；2010 年 10 月の「子どもを育む『環境』の力」[3] と 2011 年 10 月「子どもを育む『わ』の心」[4] を実施した。

さらに 2 年間の研究総括の催しとして、2012 年 2 月に川崎市アートセンターアルテリオ小劇場にて、「劇場版あそびのちからはいのちのちから」を開催した。第一部は、大橋研究室が中心となり、発達障がいの中学生と学生たちが共に集い遊ぶ活動を通して生まれた作品を含むダンスパフォーマンス（約 60 分）を上演した。第二部は、「子どもの育成支援における遊び環境の意義」と題した小林芳文の講演を中心にプロジェクトの研究活動報告を行った（写真 1)。

さらに、2011 年 3 月の東日本大震災を受け、「生きる力を支える遊び」について発展的な議論を行うため、講師を招き、「東日本大震災からまもなく一年、いま、あらためて『遊び』の意義を問う」と題したシンポジウムを実施した。

まず、宮井優（ドキュメンタリー・報道番組ディレクター）が、「被災地映像で“遊ぶ”危うい我々――現地を取材、メディアに関わり見えたもの」と題し、被災地の取材映像の提示と共に震災に関わる報道のあり方を鋭く評しながら「遊び」の根本的な意味を問うた。続いて、大山壮郎（NPO 法人ヴェレン大洗 SV 代表理事）が、「震災復興で実感した地域力と遊び活動の関係性――茨城県大洗町におけるサッカークラブの活動から」と題し、被災地の一例として子どもたちを取り巻く状況を伝え、遊び活動による支援の課題や可能性を語った。また、堂前雅史（和光大学地域・流域共生センター長）は、「市民社会を支える『道楽』のすゝめ――和光大学・かわ道楽からの提言」と題して、プロジェクトの一環とした実施された「親子で『遊び力』UP 大作戦！」で川遊びの回を担当した「和光大学・かわ道楽」の学生たちが、自らの活動を「ボランティア」ではなく「道楽」と称して楽しんでいる様子を伝えた。最後に、最首悟（和光大学名誉教授）が、プロジェクト

写真1：シンポジウムで配布した「あそびのわわプロジェクト」報告書

3）2010 年 10 月実施。詳細は、小林芳文・大橋さつき他「公開シンポジウム　子どもを育む『環境』の力」,『東西南北 2011』和光大学総合文化研究所，2011，pp.4-34. を参照。

4）2011 年 10 月実施。詳細は、小林芳文・大橋さつき他「シンポジウム 子どもを育む『わ』の心」,『東西南北 2012』和光大学総合文化研究所，2012，pp.179-214. を参照。

の報告や他のシンポジストの内容を受け、また、観客席に語りかけるように「いのちとあそび」について論じ、意見交換への流れを作った。

東日本大震災によって、和光大学周辺の地域には直接的な被害はなかったものの、様々な情報が錯綜する中、プロジェクトで予定していた遊び活動は一旦中止することとなり、活動が再開した時には、遊びの場に集うことの有り難さを参加者がそれぞれに噛みしめているように感じられた。プロジェクトでは、今、私たちにできること、今こそ成すべきことについてあらためて考え、「生き方」や「暮らし方」についてあらためて考えざるをえない時だったからこそ、「衣・食・住」の次になってしまいがちな「遊び活動」の意義をあらためて問い直し、「あそびのちからは いのちのちから」を後半のテーマに掲げ活動を展開した。その集大成として実施した「劇場版」では、「笑顔が笑顔を呼ぶ遊びの場づくり」に向けて活動してきた本プロジェクトの成果を 200 名近くの来場者と共に確認することができたのではないだろうか。

(4) プロジェクト終了後の展開

①東北版あそびのちからはいのちのちから――文科省科学研究費を受けて

写真2-1, 2-2：東北版あそびのちからはいのちのちからの活動の様子

プロジェクト終盤から、既に被災地に向けて何ができるか問い続け、終了後もプロジェクトの活動によって連携したNPO 法人等と共に自主的な活動を続けた。2012 年秋には、宮城県石巻市や福島県郡山市で単発の親子遊びのプログラムを提供しながら、被災地におけるニーズを調査した。

そして、文科省科学研究費の助成による研究プロジェクト「原発事故影響下の子どもの発達と幸福感を育む室内遊びの開発と地域支援の実証的研究」（通称：東北版あそびのちからはいのちのちから）[5] が 2013 年度より 3 年計画で始まり進行中である。福島第一原子力発電所の事故以来、低線量放射線環境下の地域では、子どもたちは外遊びや自然活動が制限され、親は子どもの健康や発達に不安を持ち続けてお

5）科学研究費課題番号：25350948、基盤研究（C）2013-2015 年度,「原発事故影響下の子どもの発達と幸福感を育む室内遊びの開発と地域支援の実証的研究」、研究代表：小林芳文、研究分担者：大橋さつき.

り、子どもの発達と幸福感を支える豊かな室内遊び活動が必須である。現在、ムーブメント教育・療法をもとに原発事故影響下にある地域の子ども育成支援を目指した室内遊びのプログラムを開発・実践すること、さらに継続的展開に向けた地域支援として、親や住民を対象としたリーダー養成や地域施設を活かした試みに取り組んでいる。室内環境としては体育館や広いホールだけでなく、公民館の和室やショッピングモールの狭いプレイスペースなどでも、ムーブメント遊具を活用することで十分な運動課題を提供できることに手応えを得ている(写真 2-1, 2-2)。また、遊び経験の不足による発達の偏りや遅れを遊びの中で見極め、その場で具体的な支援法を提供することができるこの方法論は、子どもたちの発達に漠然とした不安を抱える地域では効果を発揮している。さらに、子どもたちに、場所と遊具を与え、「遊ばせる」環境を提供するだけでなく、共に遊ぶ大人が環境になることが重要であり、ムーブメント活動によって、参加者同士の関わりが増し、自然なコミュニケーションの機会が創り出されることを確認している[6)]。

2014 年 3 月 2 日は、中間報告の催しとして、「『ふくしま』で、いま、『ムーブメント』にできること」(郡山女子大学) を実施し、現場の関係者との連携を深めることができた。

②発達障がい児の育成・支援に焦点を当てた展開

この十年程で、日本では、医療・教育・福祉の現場において、障がい児を取り巻く制度や教育環境は大きく変化した。特に、「発達障害」をめぐる地殻変動のような動きが起きたと言われている。2007 年度の特別支援教育導入により、発達障がい児の指導が位置付けられたことから、LD、ADHD、ASD の子どもたちへの対応を意図した取り組みが必須とされたが、ムーブメント教育・療法は、それらを先取りする形で発達障がい児の支援の新しいあり方を提唱してきた[7) 8)]。しかし、本プロジェクトの公開研究会や研修講座で行われた質問応答や意見交換を通して、より発達障がい児への支援のニーズが高まっていることを実感し、さらに強く発信していく必要性を確認した。

2011 年には、日本特殊教育学会第 48 回大会で、「発達障害児へのムーブメント教育による支援―その現状と今後の展望を考える」と題した自主シンポジウムが企画され、特別支援教育の現場や地域支援における実践報告をもとに、子どもと環境の好循環による発達支援のあり方について議論がなされた。全体討議からは、特にムーブメント教育・療法独自のアセスメントである「MEPA (Movement

6) 惠濃志保・大橋さつき「福島の親子を対象としたムーブメント法による室内遊びプログラムの実践」, 平成 25 年度日本児童学会学術研究集会」, 2013, 富山大学.
7) 小林芳文『LD 児・ADHD 児が蘇る身体運動』, 大修館書店, 2001.
8) 小林芳文・是枝喜代治『楽しい遊びの動的環境による LD・ADHD・高機能自閉症児のコミュニケーション支援』, 明治図書出版, 2005.

Education and Therapy Program Assessment)」の注目が高いことも確認された[9]。さらに、大橋は、「身体性」「発達性」「環境性」「関係性」「遊び性」の5つの視点から発達障がい児支援におけるムーブメント教育の効用について論じた[10]。また、ムーブメント教育による発達障がい児支援の集大成として、各現場における豊富な実践事例を含んだ『発達障がい児の育成・支援とムーブメント教育』が出版された[11]。

4――子どもの育ちに寄り添うために
―2014和光大学開放センター地域連携講座より

(1) 講座のねらいと概要

地域の方々の要望に応える形で、2014年7月、和光大学にて全4回の地域連携講座「子どもの育ちに寄り添うムーブメント教育・療法の理論と実践」(川崎市教育委員会連携事業) が開催された。この講座は、ムーブメント教育・療法の理論と実践方法をもとに、保育・幼児教育・子育て支援・療育・特別支援教育など様々な現場で、子どもの育ちに寄り添う人たちが楽しい遊び活動を軸とした発達支援法を身につけることを目的に計画された。特に遊具や音楽を活かした具体的な実践法や遊び活動の中で無理なく展開できるアセスメントの活用について解りやすく伝えることができるよう準備された。

写真：3-1, 3-2研修の様子

単発での受講も可能としたが、全4回の講座に連続して参加することで、より内容が充実するように工夫された。各回定員50名を越えた申込みがあり、キャンセル待ち等の対応を行ったがやむなく断るケースもあり、ニーズの高まりを示した。講義と実技の両方が盛り込まれ解りやすく充実した内容であったと概ね好評で、明日から実践していきたいという声が多く満足度の高い結果となった（写真:3-1, 3-2)。

9）飯村敦子・大橋さつき・小林芳文（他）「発達障害児へのムーブメント教育による支援――その現状と今後の展望を考える」, 特殊教育学研究, 48(5), 2011, pp.483-484.
10）大橋さつき *The Effectiveness of Movement Education in Supporting Children with Developmental Disorders*, 『和光大学現代人間学部紀要』, 7, 2014, pp.157-176.
11）小林芳文・大橋さつき・飯村敦子『発達障がい児の育成・支援とムーブメント教育』, 大修館書店, 2014.

(2) 講座の内容と実際

講座は、各回にテーマを設け、学外の講師も招き、講義、実践報告、実技を織り交ぜながら展開した。

初回の【第１回：ムーブメントってなに？ 理論と方法の基礎を理解しよう！】(2014 年 7 月 6 日) では、筆者らが講師を担当し、「ムーブメント教育・療法の活用の実態～これまでとこれから」、「子どもの育ちに寄り添うムーブメント教育・療法～フロスティッグ理論の理解・NewDVD を通して～」の講義の後、実技を交えながら「ムーブメント遊具の紹介と活用のポイント」と「発達の『流れ』と『広がり』に寄り添うムーブメントプログラムづくり」を実践した。

【第２回：一人ひとりの子どもの発達と家族の幸せに寄り添うために】(2014 年 7 月 12 日) では、アセスメントを中心とした内容で、筆者らによる講義「個性・発達に寄り添うムーブメント～アセスメント (MEPA-R、MEPA-ⅡR) に込められた理念～」の講義の後、碓田美保 (国立病院機構まつもと医療センター中信松本病院保育士) が「重症児 (者)・重度重複障がい児が求めるムーブメント～MEPA-ⅡR の活用～」と題して、実践報告を行った。実技では、筆者 (小林) が「重症児 (者)・重度重複障がい児のコミュニケーション支援の実際～MEPA-ⅡR における考え方と実践紹介～」と飯村敦子 (鎌倉女子大学教授)「MEPA-R の活用～5 つのパターンの概要と支援プログラムの実際～」を担当した。最後に小林保子 (東京福祉大学短期大学部教授) が「障がい児 (者) と家族の QOL 支援の現状と課題～ムーブメントに寄せられる期待～」と題した講義を行った。

【第３回：特別支援教育・発達障がい児支援に活かすために】(2014 年 7 月 19 日) では、まず、安藤正紀 (玉川大学教職大学院教授) が講義「特別支援教育の現状と課題～いま、あらためてムーブメントにできること～」を担当した。特別支援教育の現場でムーブメント法を活用している大越敏孝 (茅ヶ崎市立汐見台小学校教諭) と丹澤法明 (茅ヶ崎市立茅ヶ崎小学校教諭) が「特別支援学級の教育に活かすムーブメントプログラム」として楽しい実技例を紹介した。続いて、特別支援教育において特に注目が集まっている発達障がい児を対象にした展開として、筆者らが「発達障がい児の育ちに寄り添うムーブメント」の講義と「発達障がい児のエンパワメン

写真4-1, 4-2：プログラム「夏祭りを楽しもう！」の様子

トを支えるムーブメントプログラムの紹介」として実技を担当した。

最終回となる【第４回：育ち合いの場、共に生きる場、遊びの場～ムーブメントの未来に向けて～】（2014 年 7 月 27 日）では、受講者はサブスタッフとして、体育館アリーナで実施された「和光大学公開親子ムーブメント教室～夏祭りを楽しもう！～」のプログラムを体験した（写真 4-1, 4-2）。

プログラムのリーダーを担当した惠濃志保（NPO 法人 Creative Movement & Dance ゆうゆう代表理事）が実施プログラムの解説を添えながら「クリエイティブムーブメントの意義と活用」についての講義を担当した。その後、筆者（大橋）が地域連携活動を紹介した後、締めくくりの実技として、並木淑乃（鎌倉女子大学非常勤講師、元鎌倉市立小学校教諭）が「笑顔が笑顔を呼ぶムーブメントの輪～交流学習・地域療育・子育て支援における実践紹介～」を行った。

毎回、質疑応答・意見交換の時間を最後にとっていたが、特に最終回では時間を長めに設定し、参加者間での意見交換が活発に行われた。終盤では、繰り返し学んでいる者や組織的に活動に取り組んでいる団体に所属する者が、今回初めて学びこれから取り入れていきたいと考えている者へ、自らの経験をもとに積極的にアドバイスする場面が見られた。その助言内容も有意義なものであり、大学と地域の連携から生まれた学び合いの姿を確認することができた。

５―― 大学と地域の連携から見えてきた新たな可能性

（1）学生による出張型ムーブメント教室より

和光大学親子ムーブメント教室には、2004 年の開始当初より、学生たちが企画・運営に関わり自主的な研究活動を展開してきた。学生たちの研究グループは、2007 年度より、和光大学学生助成金の制度の下で継続的に研究活動を行ってきた。また、学外で開催される子育て支援や障がい児支援の活動にも学生たちが積極的に参加している。2009 年 2、3 月には、大学と地域の双方におけるさらなる人材育成の場として「さがまちコンソーシアム大学『学生講師』プログラム」という、地域市民向けの講座が企画されたが、カリキュラムづくり、当日の講師までの一連の講座運営を学生グループが担当する試みが採択され、室内プール（さがみはら北の丘センター）、劇場（グリーンホール相模大野）という地域の施設（環境）を活かした親子ムーブメント教室を開催し好評を得た。

さらに、2010 年度からは、和光大学付近にある児童館型施設「岡上こども文化センター」における子育て支援事業の一環として、就学前の幼児親子を対象としたムーブメント教室を月に一回のペースで担当するようになった。既に地域に密着した子育て支援の場である「岡上こども文化センター」に学生たちの方が出向く形態をとったことから、それを迎え入れる側の施設職員や保護者がリーダーを担当する若い学生たちを自然とサポートし主体的に関わるという連携の構図が

生まれた。また、学生たちにとっても単なる通学路だった大学周辺地域の印象が変わり、活動日以外にも関係を持ち、まるで「ご近所さん」のように地域の子育ての有り様を身近に感じているようだ。少子化の中、次世代育成の面でも意義深い変化が起こっている（写真5）。

2012年度には、地域と連携を深めながら、遊びの場づくりに貢献してきたことが評価され、「財団法人・学生サポートセンター第10回『学生ボランティア団体』助成金」において「地域連携（交流）」の分野で、支援先団体に採択された。生活圏をともにする者同士が子どもたちを中心に互いに関わりあう連携をつくりだすことで、「支援する側－支援される側」という関係を越えた子育て支援の新しい姿を見出している。

（2）保育士・保育所を核とした取り組みより

2011年度より、神奈川県川崎市では保育園業務がそれぞれの区役所に移管され、区ごとに区民のニーズに合わせた保育や子育て支援をしていくことになった。このような流れの中で、和光大学に隣接する麻生区では、学生たちの岡上こども文化センターでの活動をきっかけに、ムーブメント教育・療法による大学との連携を図った。公立保育園の多くの職員が和光大学で開催される研修講座等に参加したり、行政主催の職員研修会の講師を筆者らが務めたりして、学びの場を継続してきた。現在では、NPO法人日本ムーブメント教育・療法協会認定の指導者資格保持者である保育士らを中心に、各園の通常保育における活動と地域子育て支援の両面でムーブメント教育・療法を活かしている。さらに、発達障がい児や「気になる子」を含んだインクルーシブな活動も実現させており、保育士の資質向上に効果を見せている。

写真5：岡上こども文化センターの活動の様子

子どもにとって遊びは生活そのものであり、子どもは遊びを通して成長発達していくとする理念を持つ保育士らにとって、遊びを原点とするムーブメント教育・療法には共感することが多く、理論を学ぶ度に「自分たちが今までやってきたことが間違っていなかったという裏付けを得て確固たる自信に繋がった」との意見が多く寄せられた。

最近では、元来保育で用いられてきた「絵本」をもとにしたプログラムや「わらべうた」「ふれあい遊び」を軸とした親子ムーブメント等保育士・保育園の特徴を

活かした独自の発展も見せており、興味深い（写真 6）。

（3）地域子育て支援センターにおける多世代交流の試み

川崎市宮前区にある「地域子育て支援センターすがお」でも、大学における研修で学んだ施設スタッフ（保育士）らが中心となって、ムーブメント活動を展開している。公立幼稚園跡地に設置された広い庭とホールや複数の部屋を含む豊かな施設環境において、高齢者ボランティアの会「ひなたぼっこ」の協力が魅力的な展開を生んでいる。地域子育て支援の活動にムーブメント教育・療法を取り入れることで、ボランティアとして参加していた高齢者が共に活動する場面が増え、より積極的に場を担うようになったという。その結果、多世代交流がスムーズになり、子どもの発達支援と参加者全員の健康増進を同時に図ることが可能になっているのである。親子と高齢者は交流することでお互いに癒され幸せな気持ちになるようだ。

ここで行われている多世代交流型のムーブメント活動は、子育て支援であるとともに高齢者に生きがいを与える活動でもある。高齢者を対象としたムーブメント活動は「シルバームーブメント」と呼ばれ既に各地で実践されて成果を上げているが、少子高齢化の現在、地域子育て支援の担い手として元気に活躍する高齢者の姿は、ムーブメント教育・療法のさらなる可能性を示している（写真 7）。

写真6：上麻生保育園での活動の様子

写真7：シルバーボランティアの活躍の様子

6 —— まとめ

（1）共に生きる場を共に創る

ムーブメント活動においては、子どもの主体的なかかわりを促進し、周囲がその子の存在を喜び、肯定的に受け止め認めることが可能である。発達の「流れ」と「広がり」に基づいた理論を軸にした活動は、子どもの得意な面（ストレングス）を活かしながら、スモールステップで自信や達成感を大事にする。子どもには、自分こそ世界を生きる主人公なのだという自分への自信や肯定感、自尊感情が生まれ、そのような経験を繰り返すことで肯定的な自己イメージが定着し、人間の尊厳に結びつくアイデンティティの形成へと通じていく。

かつ、同時に、集団活動を基本とする

ことから、一人ひとりの「個」を受け入れながら、共に創る時空間やイメージを共有する中で「共同性」を高め、共に居ること、共に動くことを喜びと感じる場面を多く設定することができる。互いに認め合い他者を思いやり、役割や責任の意識をもって協力する体験への展開が可能である。たとえ一人ひとりの力は小さくとも参加者が協力したり担い合ったりすることで、共同体としての「私たち」は大きな達成感や喜びを得ることができる。

すなわち、ムーブメント教育・療法による遊びの場は、一人ひとりの子どもが自分らしさや個性を発揮しながら他の子どもや大人とかかわりを通して互恵的に育ち合う場であり、様々な共有体験が、共同体としての育ちを支えていると言えるだろう。教育も福祉も、「私たちはどのような社会づくりをめざすのか、どのような未来を創るのか」という判断に密接に結びついている。フロスティッグの唱えるムーブメント教育・療法の最終的な目的は「健康と幸福感の達成」であり、幸せな社会の創造とそれを担う個人の育成にある。豊かな遊び活動を媒介として「共に生きる場を共に創る」ことは、未来の世代も含めたすべての人間の幸せとは何か、という問いに向かい続ける実践的アプローチであると言えるだろう。

(2) コミュニティの再構築をめざして

2012 年 4 月に、児童福祉法の改正が施行され、障がい児の支援主体が原則として市町村へ一元化された。今後は、自治体が学校や保育所と連携を取りながら「身近な地域での育ち」を強く意識した障がい児支援の展開が期待されるのである。子どもが自ら育つという見方から、子どもの「育ち」を支えようとすると、どのような人的・物的・社会的環境が必要であるかという議論になり、そこには、家庭・学校・地域の連携によるコミュニティ全体の環境をどのように整えていくかという発想が生まれる。そもそも、「コミュニティ」という言葉は多岐に渡る分野で用いられており、その意味も多義的であるが、「地域性」と「共同性」の二つの要素から構成されている社会をさすと考えることができる。東日本大震災を契機に、今あらためて「地域コミュニティ」の価値と役割が見直されており、「共に生きる社会の実現」は、もはや、障がい児者支援のためだけのテーマではない。現在の日本では、地域社会が崩壊し連携のシステムは失われ共同体が解体された社会の中で孤立した人間関係が際立っている。個人一人ひとりの尊厳と自立した個人による共同性の良いバランスから生み出された「新しい共同性の構築」が課題となっている。具現化する取り組みとして、「『みんなで子育て』を進める擬似的共同体」が求められてくる[12)]。

和光大学と地域との連携によって生まれたムーブメント活動においては、参加

12) 山極完「新時代の育ちと育て――わたしたちの手で創る『子育ち』」, 愛知東邦大学地域創造研究所（編）『「子育ち」環境を創りだす』, 唯学書房, 2008, pp.161-175.

する大人が子ども以上に元気でいきいきしている。そして、時折、参加している親子の組み合わせが解らないことがある。これは、全ての大人が全ての子どもに関わって、共に遊ぶ主体として参加しており、子どもが「私の子」でなく、「私たちの子」として捉えられ、遊びの中で、子ども同士、子どもと親、親同士、子どもと地域の人たちが活発に関わり合い、交じり合い、賑わっている状況であると考えられる。地域施設を拠点に「生活圏」を共にする者たちの交流が増し、各々が自身の健康と幸福感を実現しながら場を担い合っており、コミュニティの活性化に繋がる可能性を提示している。

遊びの場において、個の多彩な「違い」を活かす包括的な共同体が生み出されてくると、「安心感」に包まれた信頼のある関係が生まれ、多様な人々との共同体験、多彩な交わりを通して、家族だけ、母親だけの狭い利害関係に留まる子育ての窮屈さから解放され、遊びの中に子育ての楽しさを見出していく。さらに、遊びの誘引力により場に自分から関わったり、他者と積極的に協力する姿勢が増えたりすると、大人も子どもと同じように、「自分の意思に基づく自分の行動によって、環境を変えることができる」という実感を抱く経験を重ねるようになり、このような体験は、一人ひとりの主体的な行動力を支え、未来志向型の考えに導くであろう。

ムーブメント教育・療法による遊びの場は、参加者を温かく受け入れ、共に支え合い育ち合う関係を促進し、一人ひとりの変容を生む。その場を担った経験が、「自分たちが生きる場は自分たちで創る」という意識に繋がり、成熟した「市民」として、問題解決のために自ら行動し、地域社会の構築に参画、協働する原動力となるだろう。そして、一人ひとりの変容は相互的に関係し活性化し地域の子育て環境を変容させ、コミュニティの再構築に繋がる可能性を含んでいると言えるだろう。

［こばやし　よしふみ／おおはし　さつき］